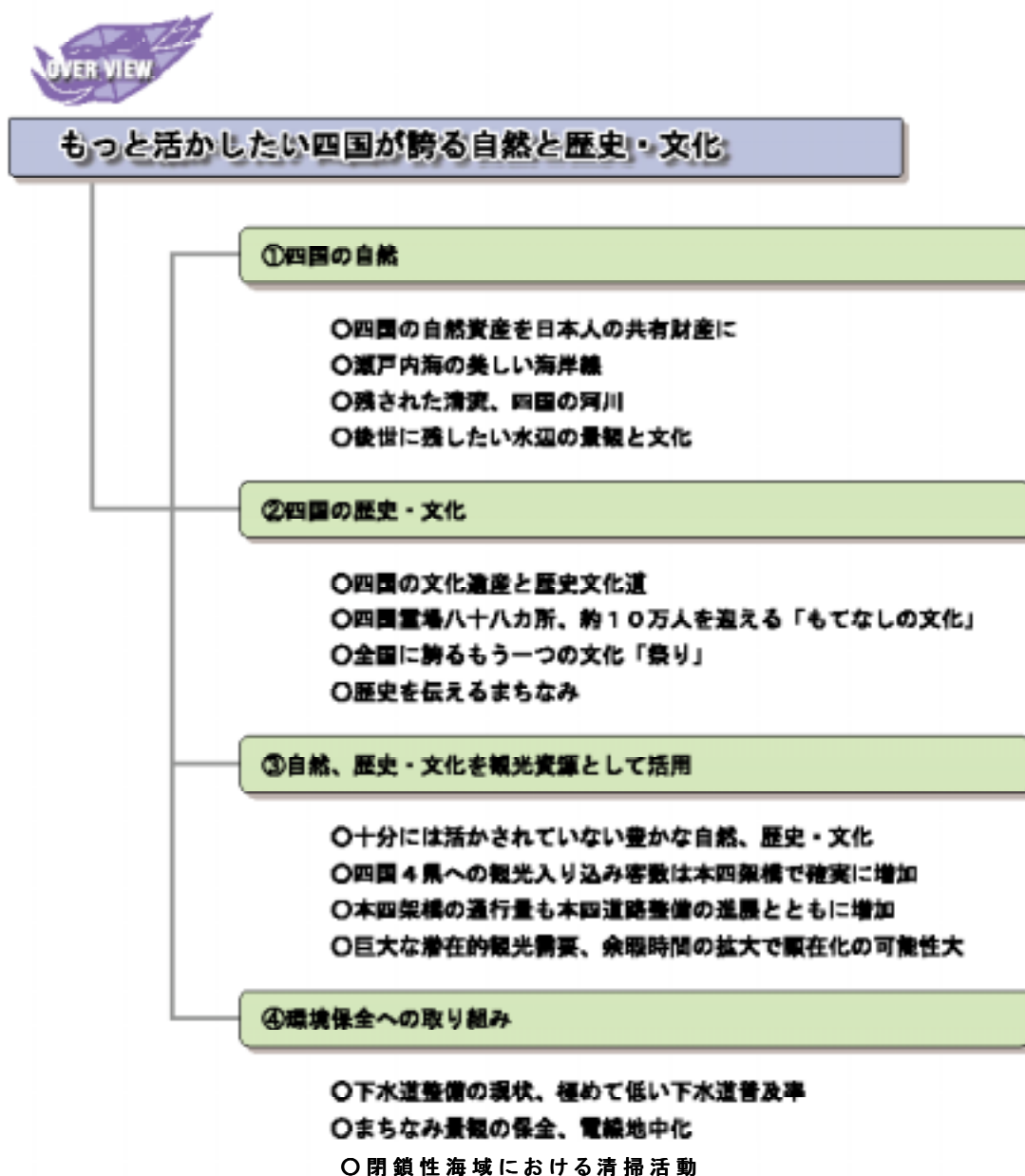


(3) もっと活かしたい四国が誇る自然と歴史・文化

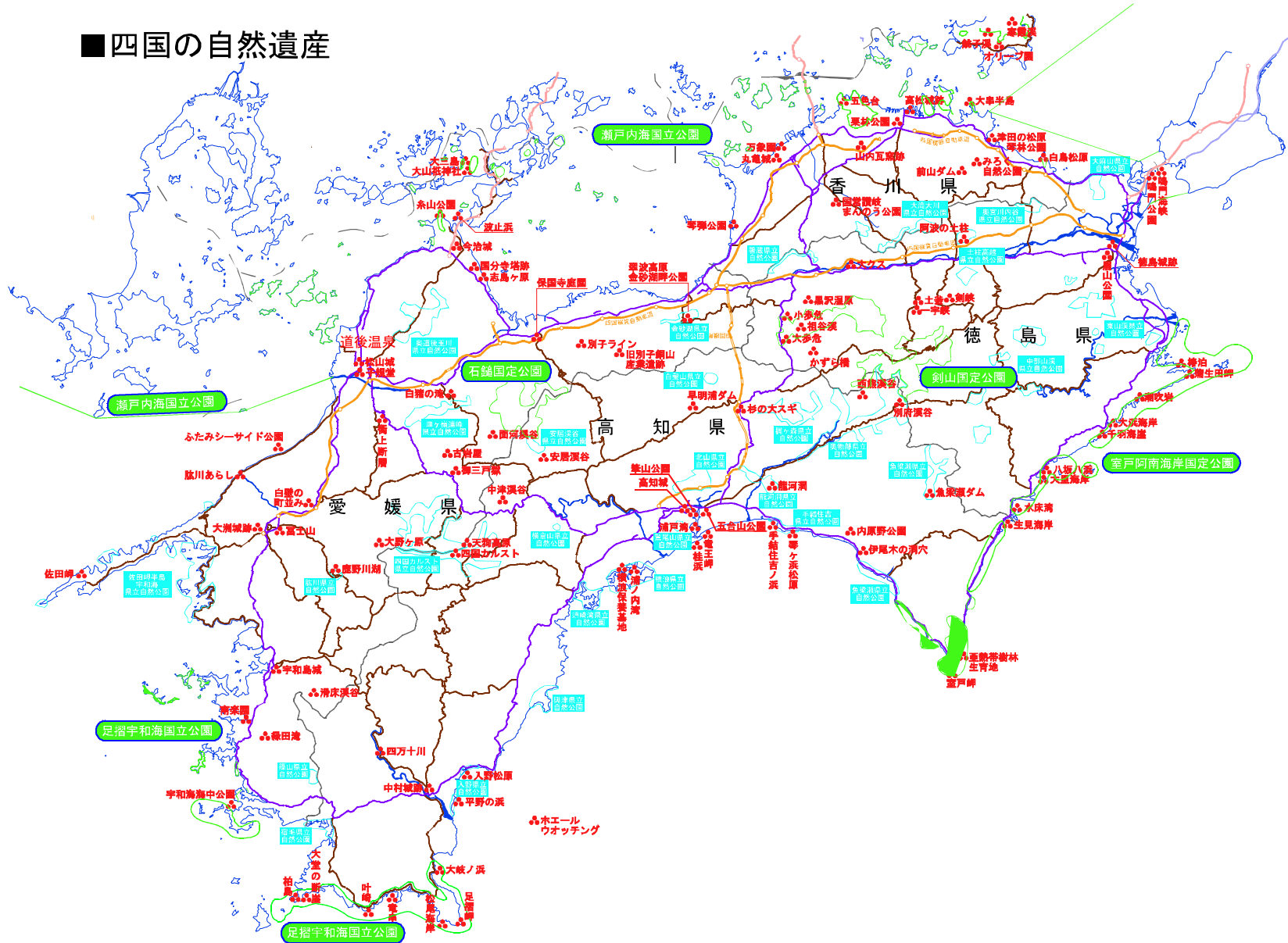
多島美に優れた瀬戸内海や四万十川の清流等の自然、四国霊場八十八ヶ所に代表される癒しの文化や歴史など、魅力あふれる四国のよさを四国内外の人が一層享受できるように、環境との共生を図りつつ「独自の魅力を創造する地域づくり」を進める必要がある。



○四国の自然資産を日本人の共有財産に

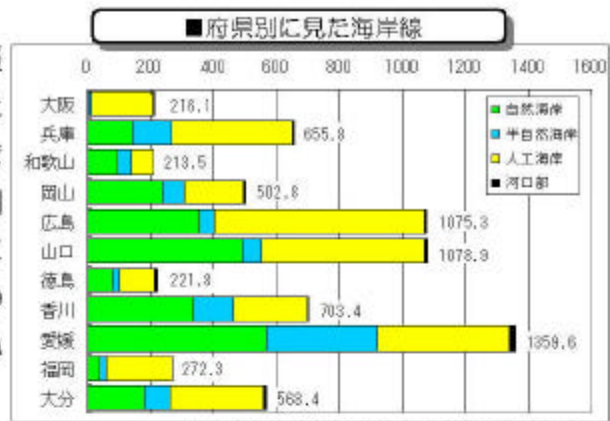
四国地域は四方を海に囲まれ、美しい海岸線、点在する島嶼部の景観が楽しめるとともに、内陸部では、険しい地形ゆえに深く刻まれた溪谷、切り立った山容、豊かな緑と清流が迎えてくれます。加えて、これらの自然環境が育んできた生態系も貴重な自然資産の一部となっていますが、この自然の豊かさ、美しさ、そして多様性は、四国の誇るべき資産であり、今後ともその保全を図りつつ、四国内外においてその独自性、希少性の再認識を促し、「日本人の共有財産」として誰でもがその魅力を楽しむための環境整備を図ることが必要です。
(次頁参照)

■四国の自然遺産



○瀬戸内海の美しい海岸線

瀬戸内海に面した府県の中では、愛媛県が突出した海岸線の長さを有し、またその半分近くが自然海岸となっています。香川県は海岸線長こそ愛媛県の6割程度ですが、自然海岸の比率は他府県に比べて高く、両県の海岸線は瀬戸内海の美しさを構成する重要な要素となっています。



出典：「第4回自然環境保全基礎調査（環境省1993）」



采島海峡大橋付近



瀬戸大橋付近



佐田岬半島

資料：四国観光立県推進協議会

○残された清流、四国の河川

H12年には四国の一級河川の水質は、上位50位に5河川がランクインしていました。しかし、H14年には1河川だけとなっており、「残された最後の清流」として知名度の高い四万十川等の河川水質の改善が急務となっています。

一級河川の水質ランキング(上位30位)

H12					H14				
順位	河川名	地方	BOD (05%値) ㎎/L	備考 (H14順位)	順位	河川名	地方	BOD (05%値) ㎎/L	
1	尻別川	北海道	0.4		1	尻別川	北海道	0.6	
2	後志利尻川	北海道	0.5		1	後志利尻川	北海道	0.6	
2	雄川	北陸	0.5		1	孔内川	北海道	0.6	
2	手取川	北陸	0.5		1	官川	中部	0.6	
2	大井川	中部	0.5		5	次野川	九州	0.6	
2	天竜川	中部	0.5		6	沙流川	北海道	0.6	
2	播磨川	中部	0.5		7	鮭川	東北	0.6	
2	長良川	中部	0.5		7	黒部川	北陸	0.6	
2	宮川	中部	0.5		7	荒川	北陸	0.6	
2	備前川	九州	0.5		7	安曇川	中部	0.6	
2	小丸川	九州	0.5		7	北川	近畿	0.6	
12	徳川	北海道	0.6		7	高津川	中国	0.6	
12	沙流川	北海道	0.6		7	七遊川	四国	0.6	
12	阿賀野川	北陸	0.6		14	後志利尻川	北海道	0.7	
12	常陸寺川	北陸	0.6		14	胆沢川	東北	0.7	
12	豊川	中部	0.6		14	庄川	北陸	0.7	
12	北川	近畿	0.6		14	豊川	中部	0.7	
12	四万十川	四国	0.6	72位	14	木曾川	中部	0.7	
12	大野川	九州	0.6		19	空知川	北海道	0.8	
20	手取川	北海道	0.7		20	前橋川	北海道	0.8	
20	木曾川	中部	0.7		20	錦川	北海道	0.8	
20	飯田川	中部	0.7		20	信川	北陸	0.8	
20	佐渡川	中国	0.7		28	荒川	東北	0.7	
20	高津川	中国	0.7		28	泉野川	北陸	0.7	
20	那賀川	四国	0.7	134位	28	天神川	中国	0.7	
20	物部川	四国	0.7	45位	28	川内川	九州	0.7	
20	仁淀川	四国	0.7	7位	28	本庄川	九州	0.7	
20	川内川	九州	0.7		28	天塩川	北海道	0.8	
28	久慈川	関東	0.8		28	中津川	東北	0.8	
28	黒部川	北陸	0.8		28	赤川	東北	0.8	
28	安曇川	中部	0.8		28	常陸寺川	北陸	0.8	
28	播磨川	近畿	0.8		28	播磨川	中部	0.8	
28	由良川	近畿	0.8		28	熊野川	近畿	0.8	
28	九徳電川	近畿	0.8		28	小鶴川	中国	0.8	
28	江心川	中国	0.8		28	佐渡川	中国	0.8	
28	千代川	中国	0.8		28	京福川	九州	0.8	
28	吉野川	四国	0.8	40位	28	五ヶ瀬川	九州	0.8	
					28	曾根川	九州	0.8	
					28	山国川	九州	0.8	

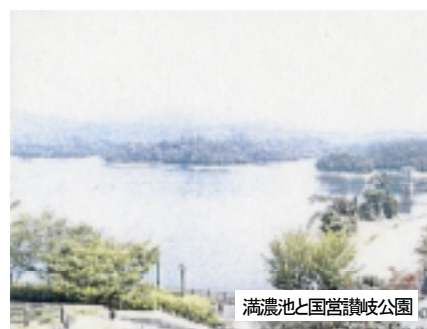
資料：「日本河川水質年鑑」(国土交通省)より作成

資料：「全国一級河川の水質現況」(国土交通省)より作成

○後世に残したい水辺の景観と文化

みずべ八十八カ所は、四国らしさを活かした四国の魅力として後世に伝えたい、地域が誇れる水辺の空間として選定したものです。今後、水辺を活用した地域の活性化、振興、発展に向けてNPOや地域住民等と連携したソフト対策の取り組みを進めていくことにしています。

■四国のみずべ八十八カ所



○四国の文化遺産と歴史文化道

四国は、古くから、奈良の都につながる南海道や海上交通の大動脈瀬戸内海などによって、各地と盛んな交流を行い豊かな文化を育むとともに、空海ゆかりの四国霊場八十八カ所など心の安らぎを感じさせる独自の風土を生み出しています。

また、明治維新など時代の節目には日本を動かす幾多の歴史的人物を輩出してきました。「歴史・文化道」は、観光客など、より多くの人々に、こうした四国の歴史・文化に触れ親しんでいただくために、官民が一体となって、現在11モデル地区の整備に取り組んでいます。



○四国霊場八十八カ所、約10万人を迎える「もてなしの文化」

弘法大師が開かれた霊場八十八カ所を巡る四国遍路は、今昔物語にも伝えられる長い歴史を持ち、巡礼者が平安朝末期から南北朝の頃にかけて、既に日本各地から訪れていたことが知られています。

■四国霊場八十八カ所位置図

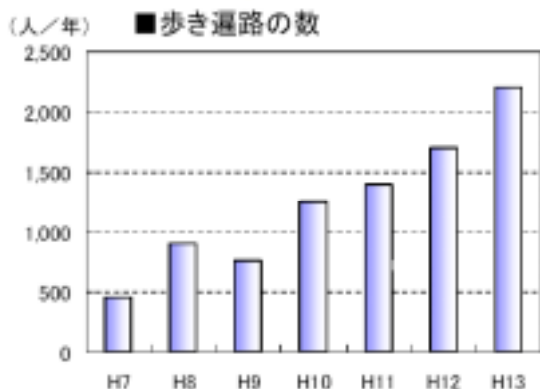


また、四国には古くからお遍路をもてなす「接待」の風習があり、住民と旅人の心温まる交流が繰り広げられています。年間約10万人のお遍路を迎える「もてなしの文化」は、四国共通の風土・人情として息づいています。



お接待のボランティアも行われている茶道(愛媛県宇和町)

語り部



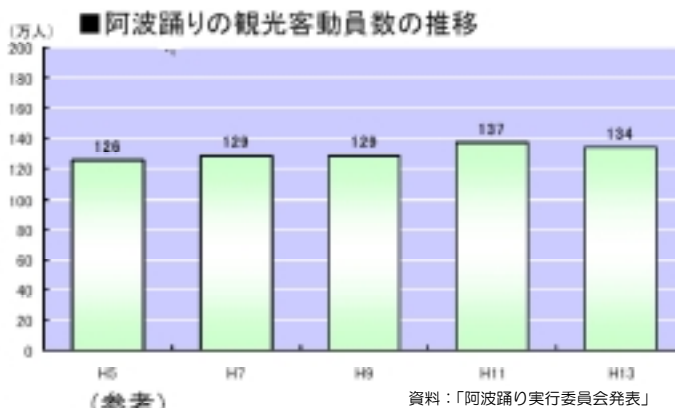
1400kmを徒歩で巡る「歩き遍路」も増加傾向です。霊場を巡る目的は人それぞれですが、厳しい道のりであると同時に、四国の自然や文化、厚い人情に包まれることの価値が次第に認められていることがその一因と考えられます。

○全国に誇るもう一つの文化「祭り」

四国の4県都では、8月に阿波踊り、よさこい踊り、さぬき高松まつり、松山まつり等が行われ、多数の観光客が訪れています。なかでも阿波踊りは全国的な知名度も高く、130万人程度の安定した集客力を有して、四国を代表するまつりとなっています。



阿波踊り



よさこい祭り	110万人 (H13)
さぬき祭り	63万人 (H13)
資料：国土交通省四国運輸局調べ	
松山まつり	49万人 (H13)
資料：松山まつりは、松山市調べ	

○歴史を伝えるまちなみ

四国の各地には、街の表情として古い歴史をそのままに残した貴重なまちなみが存在します。こうしたまちなみの多くでは、地域と住民が自らその保全に取り組みながら、地域活性化の核として活用を図りつつあります。



徳島県脇町：重要伝統的建造物群保存地区



愛媛県内子町：重要伝統的建造物群保存地区

③自然、歴史・文化を観光資源として活用

○十分には活かされていない豊かな自然、歴史・文化

旅行などで訪問した際の印象や土産物を購入した店の印象等についての調査結果によると、四国4県は、印象が極めて低いとされています（四国4県は全国47都道府県中、全て41位以下）。

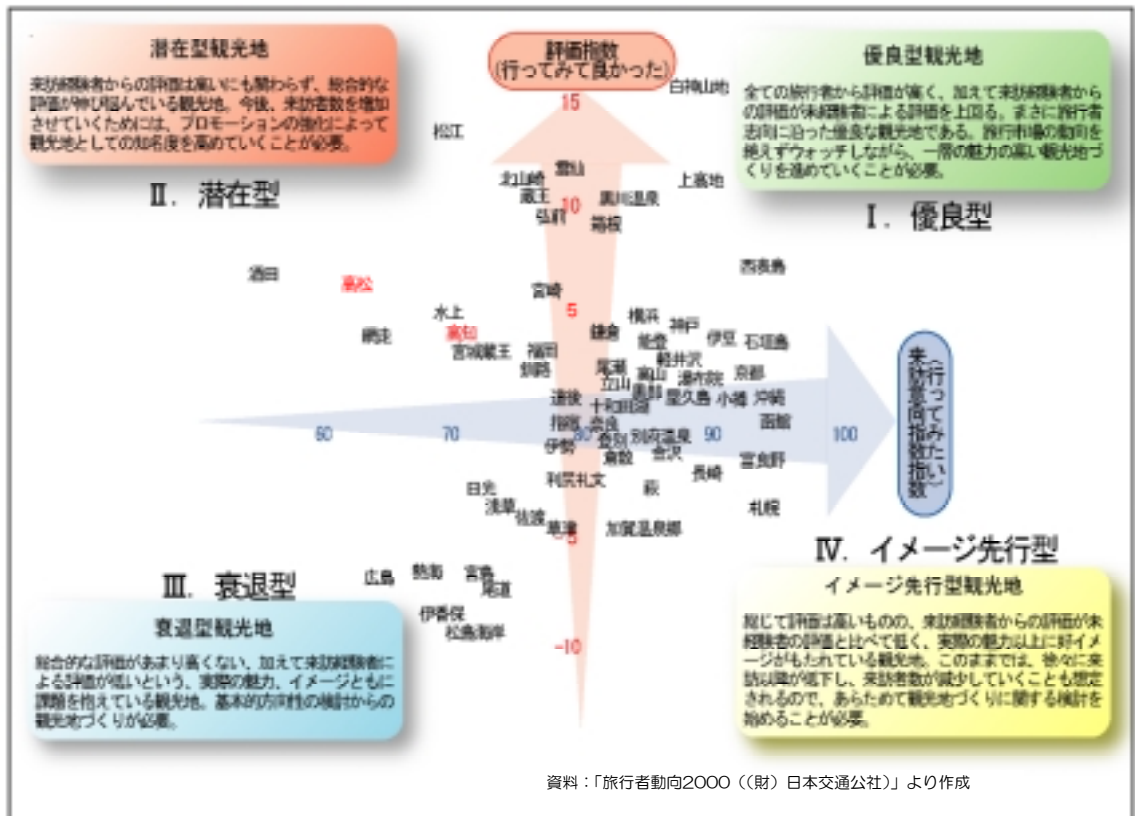
また、旅行者の意識をもとにした観光地評価によれば、四国の観光地（高松、高知）は来訪経験者からの評価は高いにも関わらず、総合的な評価に伸び悩む「潜在型観光地」に分類されています。

■都道府県別の好印象度調査(1998)

上位7県		下位7県	
1位	北海道	41位	愛媛県
2位	京都府	42位	高知県
3位	沖縄県	43位	鳥取県
4位	長野県	44位	佐賀県
5位	東京都	45位	茨城県
6位	神奈川県	46位	徳島県
7位	静岡県	47位	香川県

資料：電通総研作成

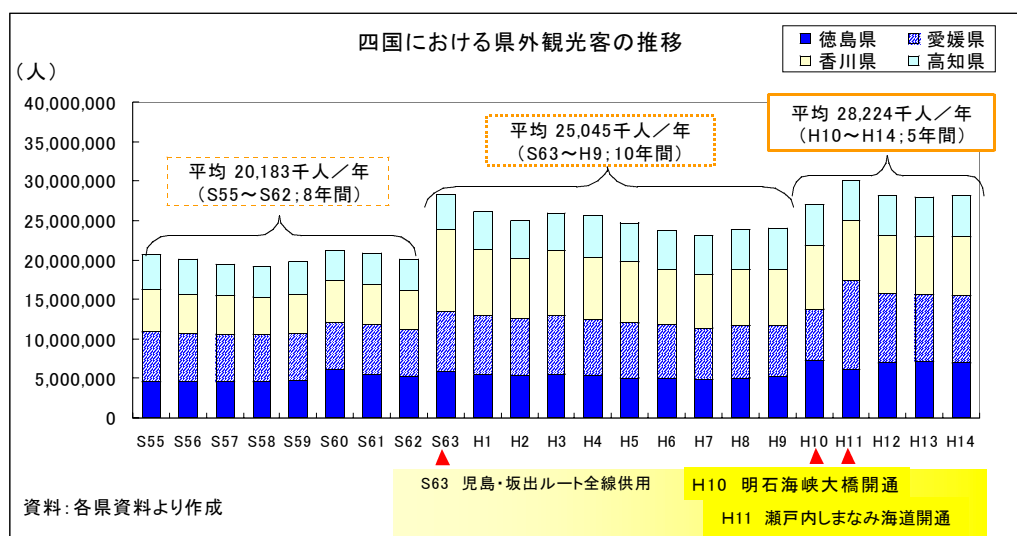
■旅行者の意識をもとにした観光地評価



○四国4県への観光入り込み客数は本四架橋で確実に増加

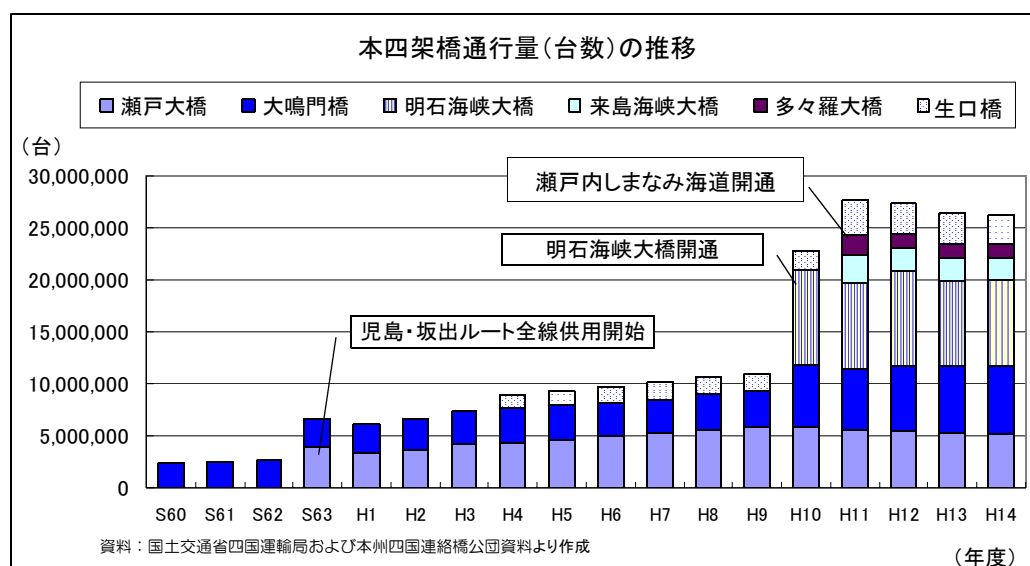
四国への観光客入り込み数は、本四架橋以降確実に増加しています。1980年代後半、1988(S63)年の児島・坂出ルート開通、1999(H11)年の瀬戸内しまなみ海道開通から、本四架橋効果により、四国への県外観光客は、それ以前の年間2,000万人程度から、約500万人増加し、2,500万人前後に底上げされました。こうした観光客の動向は、四国へのアクセス性の改善が、自然、歴史、文化、人情と多様でかつ高いポテンシャルを持つ四国の観光資源の有効活用に極めて有効であったことを示すものです

今後は四国内のモビリティを高めるなど観光資源のさらなる有効活用を可能とするための基盤整備とソフトウェアの開発、そしてこれらの観光資源を地域の資産として守りながら活用を図る地域と住民の取り組みの開始が今後の大きな課題といえます。



○本四架橋の通行量も本四道路整備の進展とともに増加

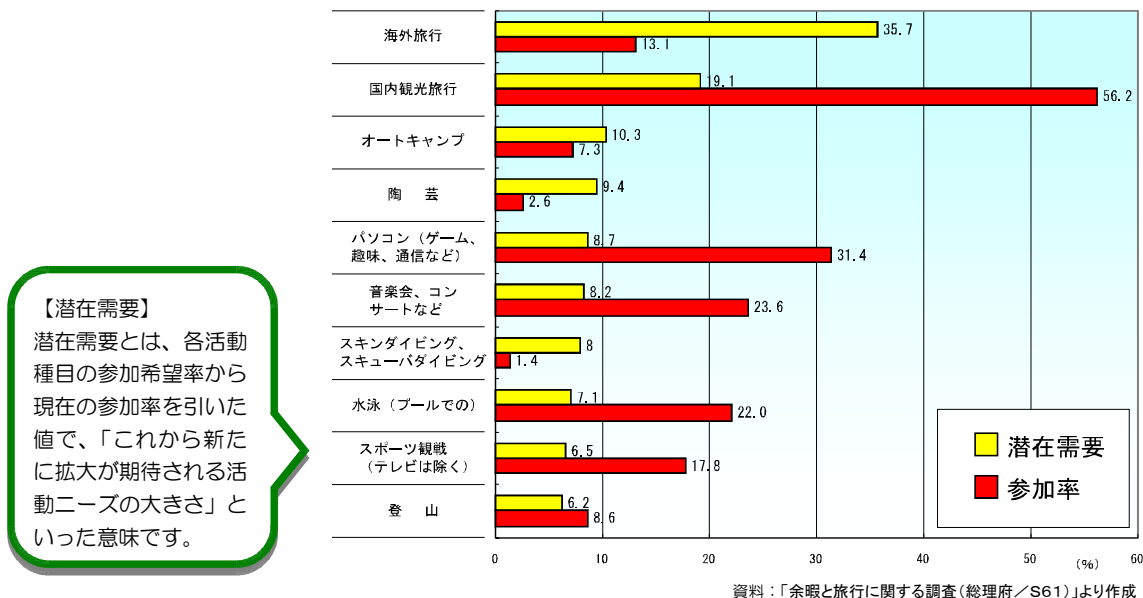
本四架橋の通行量は、1988年（昭和63年）年の児島・坂出ルート開通により年間500万台を越え、1998年（平成10年）の明石海峡大橋開通では2,000万台、1999年（平成11年）瀬戸内しまなみ海道開通では2,500万台を越えるようになりました。



○巨大な潜在的観光需要、余暇時間の拡大で顕在化の可能性大

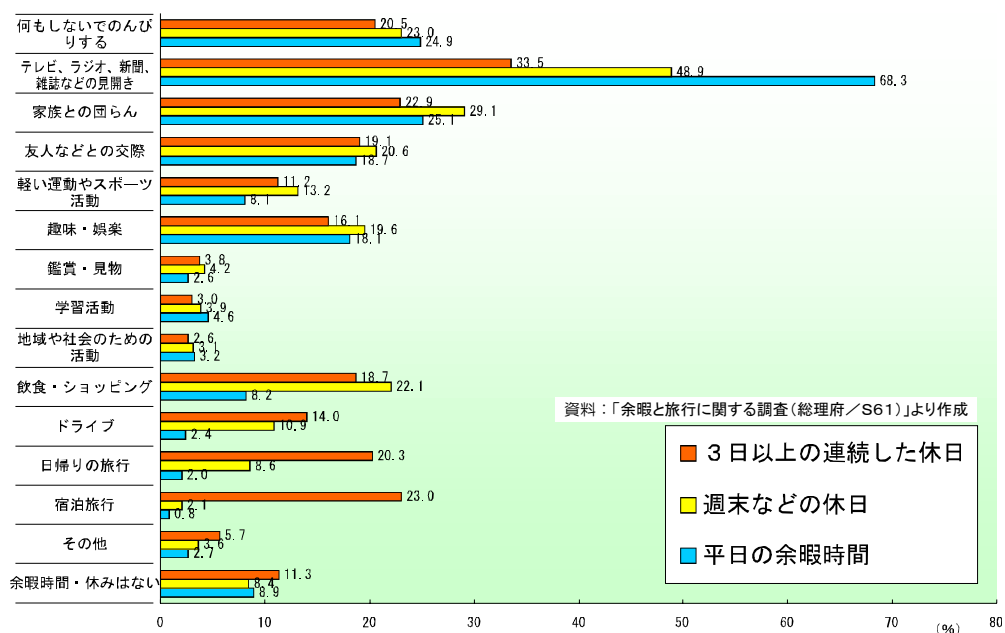
総理府の調査によれば、国内観光旅行に対する国民の潜在需要は、海外旅行に次いで第2位であり、国民の概ね2割に相当する潜在的な需要があることがわかります。国内観光旅行は、既に顕在化した需要も他の種目に比べ多いのですが、未だ膨大な未開発顧客を抱えた市場であり、その一部が顕在化することでも四国の活性化に十分なインパクトを与えるものと考えられます。

余暇活動の潜在需要（上位10種目）



また、下図に示したように、日帰り旅行、宿泊旅行とも3日以上の日があるると急激に需要が増加する特性を持っており、2000年から始まったハッピーマンデーや週休二日制の浸透などで、上記の潜在需要が顕在化するための環境は着々と整いつつあります。このような状況から、四国の自然、文化・歴史資産の高いポテンシャルを活用し、新たな観光需要の受け皿となることは極めて現実的な四国の活性化策の一つと考えられます。

余暇の過ごし方（複数回答）



④環境保全への取り組み

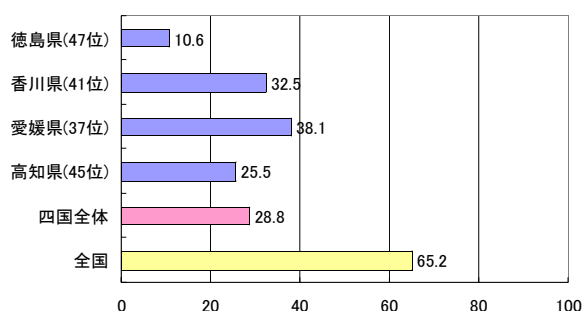
○下水道整備の現状、極めて低い下水道普及率

四国各県の下水道処理人口普及率は、全国水準の概ね半分程度で、特に徳島県は10.6%と全国でも最下位となっています。

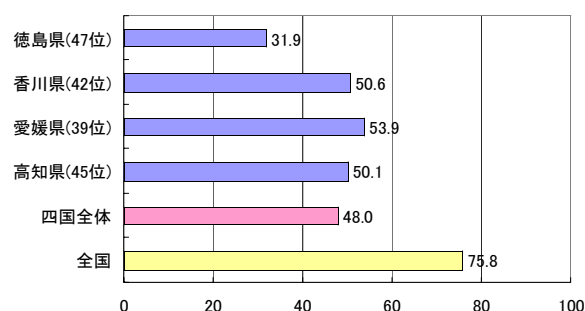
下水道は、町中の汚水の排除のほか浸水の防除、河川や海等の水質の保全、身近な水辺の創出などに重要な役割を担っています。

また近年では、下水処理水の再利用、下水汚泥の有効利用、下水熱エネルギーの活用など環境問題への対応にも取り組んでいます。

a) 下水道処理人口普及率(%)

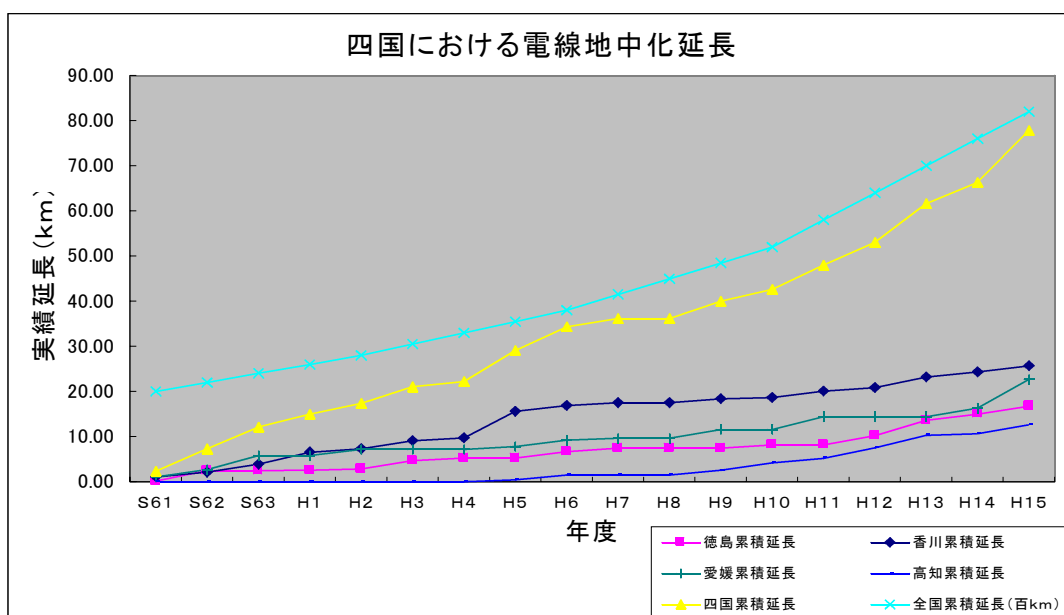


b) 汚水処理人口普及率(%)



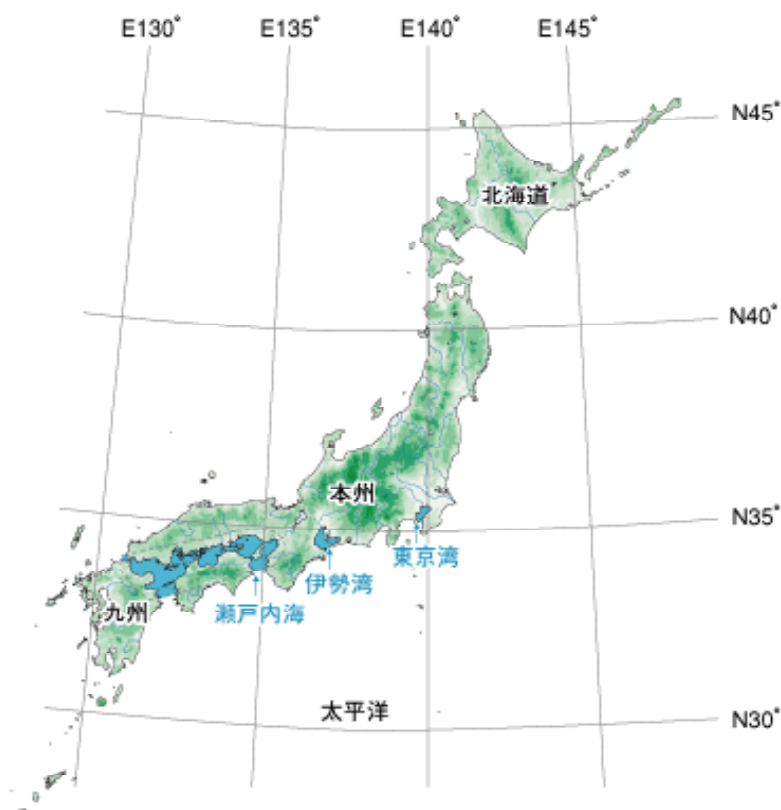
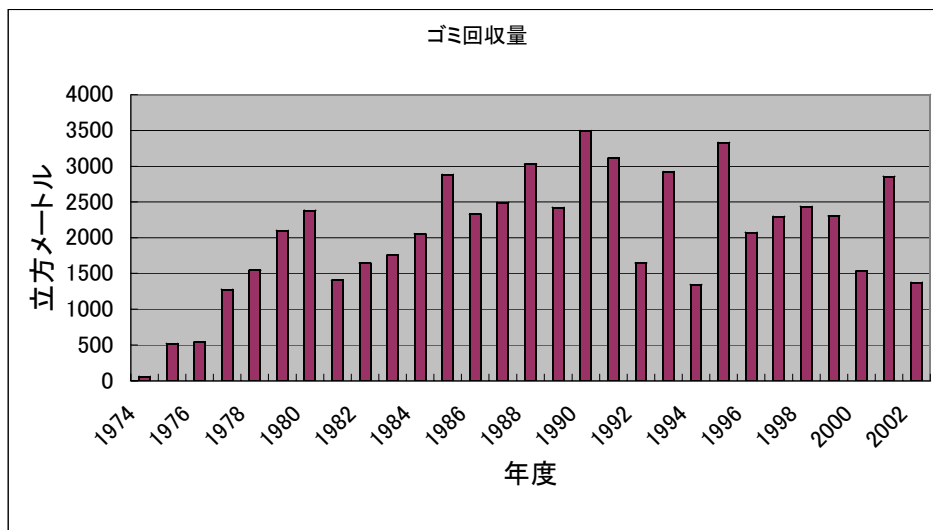
○まちなみ景観の保全、電線地中化

電線類の地中化は、昭和61年度以降、四国においても全国とほぼ同じペースで整備が進み、比較的大規模な商業地域、オフィス街、駅周辺地域等の電力密度の高い地区や、景観の優れた地区を中心に行われています。今後も「都市部の防災性の向上」「快適な道路空間の確保」「都市景観の向上」等を図るため推進する必要があります。



○閉鎖性海域における清掃活動

瀬戸内海は日本最大の閉鎖性海域であり、海水の交換がされにくく海に廃棄されたゴミや河川から流入したゴミは、そのまま瀬戸内海に漂ってしまいます。昭和49年からこれまでに瀬戸内海全体で回収したゴミの量は、大型ダンブ1万台分に達しており環境保全や船舶の安全運航上の問題となっています。



日本の主な閉鎖性海域

出典：「瀬戸内海 ー日本最大の閉鎖性海域ー」(社)瀬戸内海環境保全協会